補論㊀難民研究の課題

ある難民研究機関によると、故郷から「根こそぎにされた人々」（uprooted people）は、今世紀に入ってから累計で一億四千万に達したという。いうまでもなく難民の問題は古くからあったにもかかわらず、ごく最近まで調査研究は殆ど行われてこなかった。「移動を強いられた人々」は学者や研究者の間で無視されてきたのである。それはいったいなぜであろうか。

その理由は、「難民問題」が極めて特異な一時的現象であって問題自体に定型性がないという考え方から、学問的研究の可能性が排除されてきたためであった。加えて、難民流出は早いものでは一～二年で収まりをみせることから、これでは問題の性質を研究できないし、する必要もないという一般的認識があったようだ。また、対象の広さと問題の深さゆえに、どうしても研究が多くの学問分野にわたってしまうという特有の問題があって、研究調査が困難であることも大きな障害となってきた。

しかし、現実に難民問題は頻繁に発生しており、その解決に向けた研究調査は不可欠になってきている。問題を長期的観点から把え、これと取り組む重要性が認識されてきているのである。

◉難民研究の状況

難民の発生は一時的現象であるという不正確な見方は、研究をするうえで先ず第一に改められなければならない。なぜなら、この見方は、物事を解決せずに放っておくこと、望ましくない状態を放置することにつながるからである。つまり、難民救援事業に関し事後評価が行われないため、将来予想される難民発生の事態に対して必要な準備ができなくなり、結局また同じことを繰り返す「場当たり主義」に陥ることになる。過去の経験から教訓を学ぼうとしなくなるために、結果として調査研究が行われないのである。

過去の難民救援事業に関する報告書の多くは、難民への食糧・救援物資の輸送などについて援助計画をいかに効率よく行うかに焦点が合わされており、その改善を主眼としている。報告書自体が援助実務者の必要に沿うかたちに作成されたものであり、研究資料としては必ずしも適当なものになっていない。しかも、それら文書、資料、報告書等の多くが、難民援助機関や政府機関、NGOsのファイルの中に眠っているのである。これらの資料は図書館のカタログや文献目録などに載ることもなく、少人数の会合でごく僅部が配布されることはあっても、それも時間とともに散逸してしまっている。たまさか学術雑誌に載ったとしても、絶対数が少ないうえに難民研究という分野が確立されていないことから、検索が困難である。今後は、政府及び国際機関に活動記録を作成・保存するよう要請することが重要な課題であると考える。

一九八一年にロン・ベーカー（Ron Baker）は、「（この分野の研究は学者としての）名声が得

られない」うえ「研究上の助成金が殆どない」等の事由を挙げて、この重大な社会現象に対して専門的知識を傾注する学者がいないことを嘆いている。その言辞は悲壮なものであった。彼の発言が効を奏したのか、これ以降多くの学者が、国際関係論、政治学、難民政策等の分野で続々と研究を発表するようになった。ただし、この時期の出版物は資料上の制約もあって国際機関やNGOs等の出版物・資料に無批判に依拠しているために、本当の学問研究になっていないという批判がある。

一九八二年にはイギリスのオクスフォード大学に「難民研究プログラム」(Refugee Studies Programme)が創設され、ここで初めて学際的な学問研究が開始された。同年、UNHCRのジュネーブ本部は、各国の新聞や学術雑誌等から難民関係資料・文献目録の作成を始めている。同目録は年四回発行され、*Refugee Abstract* として現在も発行されている。

また、イギリス以外にも数多くの研究機関が作られた。例えば、カナダのヨーク大学、カールトン大学、アメリカのミネソタ、ミシガン、ジョージタウン、フロリダの各大学、アムステルダムの自由大学、第三世界ではハルツーム大学(スーダン)、ダルエスサラーム大学(タンザニア)、チュラロンコーン大学(タイ)などが挙げられる。

◉研究方法

今後、日本が難民問題や難民援助の問題に専門的かつ包括的に取り組もうとするならば、この問題を学問的に研究することが必要となるし、当然奨励されるべきであろう。しかし、最近到着

した難民や、あるいは特定の政策課題のみに研究の焦点が当てられるべきではない。各難民流出現象において共通してみられる一定のパターンを検出し、それを、過去に発生した難民現象と縦断的に対照し、同時にまた世界各国の難民現象と横断的に対比していくといった、難民問題の一般論を目指す研究が求められよう。

難民研究が扱うべき主体には、次の四つがある。難民（個人であれ、グループであれ）、各国政府（これには、難民を生み出した国、難民が最初に到着した国、第三国定住先として彼らを受け入れる国が含まれる）、受け入れ国の国民、援助実施団体（国際機関、民間組織、ボランティア団体等）である。

また、難民になるに至るにはプロセスというものがある。これを難民の側からとらえると次のようになろう。

① 身の危険の知覚
② 逃亡の決断
③ 危険を冒しながらの逃避行
④ 安全地への到着
⑤ 難民キャンプでの暫時の滞在
⑥ 解決策（帰国、第一次庇護国定住、第三国定住）の選択
⑦ 定着・定住後における生活・思考様式の調整と適応

◉これまでの研究成果

このプロセスを念頭において過去の文献を見てみると、圧倒的に「定住・同化」を扱ったものが多い。しかもそのほとんどはアメリカ人によるものである。例えば、アイゼンシュタット（S. N. Eisenstadt）は一九五四年に、イスラエル人のアメリカ社会への同化について論じた『移民の同化』（*The Absorption of Immigrants*）を著しており、そのなかで彼は、「同化」について次の三つの型があると述べている。

—同化・吸収論（Host-Conformity）

難民は定住国の文化を完全に受け入れるべきだとする考え方。

—人種のるつぼ論（Melting Pot）

当該国の市民と外来者である難民が共に変容を遂げて一つに溶け込み、より良い「合金」をつくるという考え方。しかし余りにロマンティックすぎて、実際には存在していない。

—文化多元主義（Cultural Pluralism）

難民は受け入れ社会の支配的行動様式や価値観を学んでいくが、一方で自分たちの民族としてのアイデンティティを維持していくという考え方。

この時期におけるアメリカの難民研究は、冷戦という状況のなかでヨーロッパ社会からアメリカに流入してくる難民の研究だったということができる。

一九五五年にはマーフィー（H.B.M. Murphy）が難民キャンプについて分析を行い、難民は受

け入れ国の国民から隔離され、しかもプライバシーが欠如した状態にあり、生活領域が狭いうえ非常な制約下におかれていると述べている。こういった状況が難民の「依存感覚」を生み出しているという、近年になって漸く注目されるようになった重要な見解を、既にこの時点で指摘している。ちなみに、このような難民キャンプにおける難民の経験の分析は、最も研究が不足している分野のひとつだといわれている。

一九七三年にはエゴン（Kunz Egon）が『亡命と再定住』（*Exile and Resettlement*）で、難民の流出をもたらす「プッシュ要因」を強調した。また、自らの難民経験に照らして詳細な「逃亡モデル」を作成している。彼の業績は、移民（研究）では新しい土地に引かれるプル要因を強調するのに対して、「難民は押し出される（プッシュ）」とした点にある。

一九七五年にはケラー（S. L. Keller）が『根こそぎ状況と社会変化—開発における難民の役割』（*Uprooting and Social Change : The Role of Refugees in Development*）を著している。彼は、難民の逃亡から定住にいたる各段階を区分したうえで、逃亡生活のなかで難民が被る「精神的外傷」が、その後の行動・生活に除去できない心理的影響を与えると主張した。

難民の行き着く所は定住と同化であるが、これは複雑で多面的なプロセスを含んでいるため、難民研究における他の分野と比べ、定住・同化の研究はかなりの量の文献を残している。一般には、次の四つの段階に分けて分析されている。第一段階は到着当初二～三カ月、第二段階は最初の一～二年、第三段階は四～五年後、第四段階が一〇年以上経過した後、である。分析方法としては二～三のキー・ポイントに考察の対象を限定しているものが多く、例えば職業的、経済的、

社会的、文化的適応といった側面に焦点を絞っているが、そのなかでも特に重点がおかれているのは心理的な問題である。

◉難民研究の課題

いうまでもなく難民研究が対象とする領域は非常に広く、多面的で、各分野にわたる。例えば、難民の定義、国内・国際法との関連、難民の歴史、国際機構、難民政策、発展途上国における難民の問題、女性・子供・老人などの難民グループ、障害をもった難民、といった広範な問題が存在している。「移動を強いられた人々」に対する理解を深めていくには、多様な学問分野における概念、知識、方法論を組み入れた、総合的な研究方法を確立していかなければならない。難民研究を行うには数多くの関連学問領域の壁を乗り越える、一般的で、比較の視点をもったアプローチが必要となってくるのである。

歴史上難民は常に存在していたわけであるが、難民現象、及び難民の経験や行動を見ていくと、ひとつのパターンがあることがよくわかる。難民現象を一時的で相互に特異であるとする考え方の延長上には、一般的理論の確立はとうてい望むことはできない。

難民問題を研究するにあたって決して忘れてはならないことがある。それは、この研究は、難民の苦難を救助するためのもの、そして難民援助に従事している人々を支援するものだということである。従って、その課題も必然的に明確になってくる。研究者には情報伝達の媒介者となることが期待されるであろうし、セミナーやシンポジウムの開催、教育・訓練プログラムの作成な

どを通して、難民研究の成果を広くひろめていくことが大切である。また、実際に難民援助に携わっている政府、国際機関、NGOsとの協力体制を確保し、維持していくことも肝要と考える。

（小泉　康一）

〔参考文献〕

Eisenstadt, S. N., *The Absorption of Immigrants*, London, Routledge & Kegan Paul, 1954.

Gordon, M. M., *Assimilation in American Life*, London, Oxford University Press, 1964.

Kunz, E. F., "The Refugees in Flight," *International Migration Review*, Vol. 7, No. 2, 1973.

Keller, S. L., *Uprooting and Social Change: The Role of Refugees in Development*, Delhi, Manohar Book Service, 1975.